INTERVIEW：インタヴュー

作家

片岡 義男さん

小説家，翻訳家，エッセイスト，写真家など多くの顔を持つ片岡義男さんに，幼少時代から大学進学，そして小説家としてのデビューから現在までのことを，現在もよく執筆活動に利用されているという都内の喫茶店で珈琲を片手にお話を伺いました。

聞き手・構成：高橋 辰三

―― 最初に文章にかかわるお仕事をされたのはいつでしょうか。

21歳ぐらいです。大学生のとき。翻訳でした。

―― ご自身で興味があって，お仕事を探されたのですか。

暇そうに見えたのですよ。そんなに暇なら翻訳でもやってみないかと言われてやったんです。今でいうとアルバイトです。

―― どなたか出版社でお知り合いがいたのですか。

はい。『マンハント』という雑誌で活躍をしていた先輩に小鷹信光さんという人がいて。ハードボイルドの研究家です。

―― 英語は当時からできたのですか。

はい。翻訳の場合は英語の問題よりも日本語の問題なんですね。そのころの僕が身に付けていた日本語の能力で翻訳をするわけですから。英語で読んで理解するでしょう。その理解を日本語で書かなければいけない。そうすると，僕の日本語の能力が試されるわけです。

―― 翻訳で参考にされたとか，勉強をしたというような書籍はありますか。

何もないです。

―― それまで日本の小説を読まれたことはありますか。

読んだことないです。

―― 大学で法学部に進まれた理由はありますか。

大学受験がいきなりあるわけではなくて，生まれたときからずっとつながっているんです。18歳ぐらいになるとだいたい決まっているんです，人の傾向というか，人となりというか，雰囲気というか。高校の先生の中に「君は早稲田だよ」と即座に言った人が何人かいまして。大人を信じる以外なかったので，僕は早稲田なんだと思って。一番僕に似合いそうな学部の名前が，第一法学部だったんです。

―― 法律の授業があったと思うのですが，好きな分野はありましたか。

ないです。

―― ご興味なかったですか。

残念ながら。要するに4年間という時間を稼いだだけです。4年間って非常に貴重なんですよ。高校を卒業して，そのまんま世の中に出るわけにいかないんです。弱虫だから。

―― 弱虫とは？

全然だめなんです。居場所がないんです。いわゆる社会人，世の中の人になるのに，もうちょっと余裕，つまり4年間の猶予が欲しいんです。その猶予を大学へ行って手に入れたわけです。

―― 大学3年目のときに，翻訳のアルバイトを最初してみて，どのような感想を？

片っ端から直されるだろうと思った。ところが，全然直されないんですよ。あれでいいと言うんです。

―― 片岡先生が書かれた翻訳文は，変わったところや珍しい特徴はあったのでしょうか。

珍しくないです。英語の原文は読めば分かるようにできているので。それを同じような日本語にすればいいだけだから。日本語の能力がないとできないわけです。

―― 最初の翻訳はどういった本だったのでしょうか。

アメリカのミステリー小説，短編です。「ザ・ダブルス（The Doubles）」。「そっくりそのまま」というタイトルになっていましたね。この邦訳は編集部が付けたものです。もう1人自分とそっくりな男がいる話ですよ。

―― その翻訳は苦労されましたか。

していないです。自分の日本語で書き直せばいいので，そうしただけです。片っ端から直されるだろうと思っていました。たくさん直されたら，もうやめようと思ったんです。

―― 次の仕事の依頼というのはどんどん来たわけですか。

そうです。翻訳をやると同時に，同じ雑誌にエッセイというか，漫文，つまり一人漫才のような文章を連載していたと思います。

―― 当時，テディ片岡名義だったのですね。

そうです。

―― テディというのは昔からあだ名だったのですか。

いえ，サリンジャーの短編に「テディ」というのがあるんです。『ナイン・ストーリーズ』という短編集があって，その中に「テディ」という題名の一篇があって。編集者と会ってペンネームを決めなくてはいけない日に，そのペーパーバックを持っていたんです。喫茶店で待ち合わせていましたが，ちょっと早く着いたので，コーヒーを飲みながらペーパーバックを見ていたんです。そうしたら，テディって出ているから，これでいいと思って。

―― 神保町の喫茶店が作品によくでてきますが，仕事場というか，仕事をするのは神保町周辺が多かったのですか。

はい。大学生だった当時は，とりあえず学校に行きました。早稲田のビリヤード場の壁に都電の路線図が貼ってあり，それを見ていたらば，早稲田の関口町から都電で乗り換えなしで神保町へ行けるということが分かったんです。

―― 片岡先生の作品の中で喫茶店をはしごしながら書かれる青年の姿が書かれていますけれども，それは片岡先生自身の当時の姿ですか。

そうですね。

―― それ以外の場所で書かれるということもあったのですか。

ないです。ほとんど喫茶店です。

―― 今現在の執筆も喫茶店でされることは多いですか。

今もここで書くことは多いですよ。

―― まさにこの席なんですね。

いいですよ。1日，そうですね……30枚ぐらい書けるかな。普通の短編の半分ぐらい書けます。だから，2日あれば短編が1つできるんです。

―― 片岡先生は，今も書き下ろし小説を毎年出されていますけど，執筆スピードの変化はありますか。

あまり変化していないです。ただ，ストーリーに使えるなという判断の仕方が年齢とともに柔軟になってくるかなということはありますね。年とともに使えるものが増えるんです。

―― 作品にしようという着想は，現実の生活の中で何か見たものからの影響というのは当然あると思うのですけど，それをそのまま使うのか，頭の中で組み立てるとか，想像するという部分が多いのですか。

作る方が多いですね。現実を映すということはしないです。現実がヒントになっていたり，現実の断片が中に出てきたりはしますけれども，きっと頭の中で作っています。

―― 片岡先生が20代から30代にかけて，特に翻訳の仕事から小説を書き始めるまでの期間というのは，ご自身の作家人生にとって重要な時間……。

重要ですね。

―― その頃というのは葛藤とか苦悩はあったのでしょうか。

ないんです。とにかく忙しかったです。最初は，21歳。それから小説を書いたのが34歳ぐらいです。文章を書き始めてから小説を書くまでに10年以上かかったんです。だけど，自分にとっては，30代半ばというのは小説を書くのにちょうどいいんです。20代でデビューとか，そういうのはできないし。

―― 毎日のように翻訳等，出版の関係の仕事をされていたなかで，34歳のとき最初に書いた小説が『白い波の荒野へ』ですね。

『野性時代』という雑誌が創刊されるんです。創刊によせて，そこに書けって。

―― 現在もエッセイ，コラム，映画評論等，本当にジャンルを問わず文章を書かれていますね。

小説を書く以前は，漫画の原作もやりました。いわゆる原案です。

―― 片岡先生の作品では女性漫画家が登場する作品もありますね。そのあたりもご自身の過去の体験からですか。

そうです。

―― 片岡先生は小説の中で主人公なり，登場人物がシャツはこういうのを着ている，靴はこうでパンツはこうだというような描写がかなり細かくされています。服装というのは，

作品においてそこまでの描写が必要であるという観点から書かれているのでしょうか。

程よいリアリズムで書こうとすると，服は多少書かないといけない。何を着ているかは問題でしょう。

―― 町の路地とかお店の間取りというんですか。そういった描写もかなり詳細にされていますが，どこまで詳細に書くかというのは決めていらっしゃるんですか。

決めていないです。例えば，どこから書き始めるか，というのが重要なんですよ。喫茶店で待ち合わせている男性がどこから歩いてくるか。駅から歩いてくるのか，それとも交差点を渡ったところか，どこから始まるのかによるわけです。駅から歩いてくるんだったら，その歩いてくる道順を書かなければいけないし。

―― 1つの短編小説を書き始める段階で，これはここの場面で終わりにしようとか，始まりはここから書き始めようといったことは決めていますか。

何となく決まっています。

―― 作品には，短編小説が多いのですが，個人的な好みがあるのでしょうか。

それもあるかもしれないですね。すぐ読めるでしょう。すぐ読めるということはすぐ書けるということです。

―― 片岡先生の作品は，特徴的なタイトルがまず目に入ってきます。タイトルは書く段階で決めているのですか。

だいたい決まっています。企画段階で決めます。タイトルなしで書くときもあります。

―― キャッチーなタイトルの作品がいくつもあるんですが，例えば，『ミッキーは谷中で六時三十分』は，どういう話なのかなと思いながら読み進めて行くと。

ミッキーが6時30分でこうなるわけですよ（両腕で時計の針が6時30分になるときの向きを示す）。

―― ミッキーの腕時計が。

6時半でこうなってしまう。顔はハハッと笑っているわけ。これ，おかしいですよ。

―― 谷中もそうですが，片岡先生の作品の中で電車と駅というのは重要な場所ですね。

ええ，そうです。東京の物語ですから，東京は電車の町なんですよ。電車が何本もあって，ものすごくたくさん走っている。電車に乗っていれば，ほとんどどこへでも行けるんです。電車を書いているだけで一生小説が書けると思います。

―― 片岡先生が思い入れのある路線はありますか。

あまりないですね。要するに，消えていくわけだから。

―― 消えていくとは？

30年前の電車はもうないですよね。例えば，僕が知っている小田急線の電車は2両連結でした。乗客が勝手にドアを手で開けられたんです。

―― 当時は混んでいましたか。

混んでいません。1年後にはドアが自動になっていたかな。

―― 自分もそうなのですが，片岡作品に出てくるこの喫茶店はどこなんだろうと，それらしき店に行ってみるファンも多いと思います。2018年に出された『珈琲が呼ぶ』では，その舞台について種明かししている喫茶店もありました。物語に出てくる喫茶店のモデルは実在するのでしょうか。

あります。物語にその喫茶店がある程度ふさわしければ，僕自身が作る必要はなくて，その店の通りに書けばいいだけですよ。

―― 片岡作品には切り離せない要素として，衣食住というのがどの小説でも意識されていると感じますが，片岡先生自身は生活で気を付けていることとか，仕事以外で好んでいることは何かありますでしょうか。

ないです。うんちくみたいなものはあんまり好きじゃないんです。服も下級兵士の生活のようなものが一番好きなんです。着るものが決まっているじゃないですか。順番に置いてあるので，順番に着ていけばいいんです。日本は季節があるから，季節ごとに変えなくてはいけないのが面倒です。

―― 21歳から現在までで仕事や生活のスタイルで，変わったことはありますか。

何もないです。あればいいんだけどね。転換や大きな節目がなにもない。

―― 子供のころ岩国で過ごされたと聞きました。

疎開したんです。5歳かな。

―― 疎開時代の思い出はありますか。

疎開しなければ，ずっと東京にいたんです。自宅の周辺は爆撃からは逃れて無事だった。でも，ずっと東京にいたら，だめだったと思うね。

―― だめというのは？

だめな人になっていたのはたしかです。

―― なぜですか。

よく分からないけれど，自然とのつきあいの経験が大きいかな。子供だから余計に自然を感じるんですよ。遊び道具なんてないから，遊びたければ家の外へ遊びに行くしかなくて。家の外にあるのは自然だけです。

―― 今，戦時中なんだ，と「戦争」を感じることはありましたか。

ほんのちょっと知っているだけです。

―― 原子爆弾が爆発したきのこ雲を見たというのを読んだことがあります。

見ています。あの日，外で遊んで帰るときに歩いていると，東の向こうへちょうど海と陸の境目あたりに見たことないような雲が立っていた。黒い雲が細く長く伸びていて，その上にきのこ雲です。

―― 音は聞こえましたか。

音は聞こえません。爆弾が落ちたときの閃光を後ろから受け止めました。

―― 閃光を見たのはどういうシチュエーションだったのですか。

きれいな夏の日なんです。誰も歩いていなくて。きれいな日差しの日なんです。本当に夏の日。それでそこに原子爆弾の光が重なった。妙に不吉な黄色い光です。

―― 戦争の関係で攻撃を受けたというのは分かりましたか。

誰かが後ろから懐中電灯を照らしたんだと思いました。後ろを見たら，誰もいなくて。

―― 著作『コーヒーにドーナツ盤，黒いニットのタイ。』で，当時，喫茶店でかかっていた音楽とか，ラジオでかかっていた曲について書かれていますが，片岡先生自身，洋楽，邦楽問わず，昔からお好きだったのでしょうか。

好きですね。

―― かなり多分野にわたってお詳しいですね。

いろいろな音楽があるけれど，僕が作っているわけではないから。しかも，昔は町を歩いていると音楽が聴こえたんですよ。なぜあんなに聴こえたのか謎だったんですけど。要するに店の軒先に広告のスピーカーがあって，そこからラジオが流れていたんです。

―― 歌謡曲に関してもお詳しいですね。

歌謡曲には違和感がありました。

―― 違和感というのはどういう違和感ですか。

岩国にいる子供のころ，しょっちゅう歌謡曲が聴こえてくる。なぜ聴こえてくるのかというと，ラジオからです。ある日，一日を境に戦後になったんです。戦後になると歌謡曲なんです。歌謡曲はどういうものかというと，若い女と若い男性が出会って，恋をして，一緒になって家庭をつくって，明るい未来を目指して歩んでいくって，そういう歌なんです。

―― それが戦時中の放送とまったく違う。

まったく違う。

―― そこに違和感を覚えたということなんですね。

それと，歌手が「青春の何とかパラダイス」って歌っていると，譜割りが不自然だと，聴く方も子供だから「パラダ」という「椅子」かと思ってしまう。そういう違和感もありました。

―― 日本人は英語がなかなかうまくならないと言われていますが，アドバイスはありますか。

教える方が教えるプロでなければいけない。うまく教えられる人。何でも知っている修羅場を見ている人が教える。学ぶ方は差し迫った必要がないとだめなんですよ。その2つが重ならないと。

―― 東京の風景を写した『東京を撮る』とか『東京を記憶する』等，写真集も相当数出されていますね。

十冊以上あります。

―― 東京の景色で惹かれるところはどういうところですか。

いろいろな言い方ができるんですけど，写真機を持ってある日東京を歩けば，景色がいくらでも撮れるんです。普通，人々が見たがらない景色が。

―― 『東京を撮る』を初めて見させていただいたのですが，片岡先生は，近年若い人がスマートフォンで撮ってInstagramにあげている「日常」の写真撮影を先駆けてやっているという印象を持ちました。写真集を出すという目的を持たずに撮られていた写真も多いのですか。

いえ，撮るからには人に見せようと思って撮ります。人に見せるための一番簡単な方法は写真集を作って本にすることだなと。

―― 片岡先生が先ほど言われた，東京の景色，つまり，普通，人々が見たがらない景色と表現されるのはどういうものなのでしょうか。

時間と人の手がかかった景色です。できたばっかりの景色ではない。

―― そこに魅力を感じて？

魅力がある。そういうものはやがてなくなっちゃうんです。ある日。

プロフィール　かたおか・よしお

1939年東京都生まれ。1974年に『白い波の荒野へ』で作家としてデビュー。翌年発表した『スローなブギにしてくれ』で野性時代新人賞を受賞。近著に『コーヒーにドーナツ盤，黒いニットのタイ。』，『と，彼女は言った』，『ジャックはここで飲んでいる』，『珈琲が呼ぶ』など多数。